

在日コリアンのホスト社会による民族的アイデンティティの差異

—大阪市と川崎市の行事食を中心に—

黄 慧 瓊*

目 次

- I 問題の所在
 - II 調査方法と調査項目
 - III アンケート調査結果
 - IV 民族的アイデンティティと食文化との関係
 - V 考察
-

I 問題の所在

民族的アイデンティティの問題は21世紀をむかえた今日、ますます重要な課題として私たちの目の前に現れている。第2次大戦後の冷戦体制下では、覇権を握る國の強制のもと、表面化を押しえつけられていたが、社会主義政権下にしろ資本主義政権下にしろ、國民國家の内外に民族間の対立が表立ってきている。一方、資本主義体制下では、政治・経済のグローバル化にともない、國境を越える労働人口の移動も顕著な事実として現れているが、そこにおいてもホスト社会と外國人労働者との間に「民族」間の摩擦がしばしば起こっている。こうした近年の動向ばかりか、19世紀後半から20世紀に至る過程における植民地化の問題も、今日まで續く民族問題を國民國家の内部に抱えさせている。在日コリアンの問題は、こうした植民地化の歴史を経て生み出される今日の民族問題のひとつである。植民地化以後すでに1世紀近く経ち、獨立後もすでに半世紀あまりの時間を経ているが、「在日コリアン」という通称にもあるように、日本においても、民族問題は解消されているわけではない。しかし、一方では少なくとも半世紀の時間の経過は「在日コリアン」にどのような変化を引き起こしているのか、現在という時点で改めて、食文化というものを通して検討することにする。

* 南ソウル大學校講師 日本學

こうした検討の問題意識としては、21世紀をむかえるに当たり、あるいは1970年代以降、世界の各地で政治的に共生社会や多文化社会の実現といったスローガンが口にされているが、目下のところ、そのスローガンが実現するには問題が山積みのものである。そのスローガンの下にあるホスト社会とゲストとの関係はどのようになっているのか、まずはそのスローガンのネックとなる部分はどこにあるのか、現状をつぶさに分析しなければならない。

在日コリアンの研究では、教育面・政治面・社会面など多様な方向から進められてきた。その多くは、在日コリアン社会全体と日本社会との関係という全体的視野からの対比に焦点を絞っており、在日コリアンの生活上の最小単位である家庭は主たる考察対象とはされてこなかった。しかし、本稿では従来の全体的な研究に対して、家庭に焦点をあてる。その理由はホスト社会における少数民族の文化の継承過程をみると民族全体としてではなく、家庭組織を通じて伝承されると考えるからである。特に食文化は、社会集団全体の中で伝承される側面よりも、家族内において親から子供に伝承・継承される傾向を有している。さらに食文化は、居住地域ごとにその特性が変化するとともに、食文化を共有する人間集団間にとっても、ある種の連帯感すなわちアイデンティティを共有することにより、他の人間集団と区別させる特性がある¹⁾。

本稿では前稿(黄2001、2002a、2002b、2003)をふまえて、在日コリアン²⁾の食文化に関する大阪市と川崎市の地域比較をもとに、在日コリアンにおける日本文化への適応とその民族的アイデンティティを究明するものである。地域対象として大阪市と川崎市をとりあげたのは、両者が西日本と東日本の代表的な、在日コリアンの人口が多い地域であるからで、それぞれのホスト社会との関係の在り方に両者地域差があると考えられるからである。

II 調査方法と調査項目

(1) 調査方法および対象

大阪市と川崎市における在日コリアンの集住地区を選定し、その地区における各世帯の食文化、特に行事食を中心に調べるためアンケート調査を実施し、さらに聞き取り調査も行った。

1) 在日コリアンと食文化に関する詳しい先行研究については前稿(黄2001、2002a)参照

2) 本稿での在日コリアンの定義としては、1910年以前に日本に在住した人たちの家族と子孫、1910年8月22日「韓日合併条約」から敗戦した1945年8月15日までの間、日本に在住した人たちとその家族と子孫を指す。呼称は「韓国籍」「朝鮮籍」「日本籍」を所持するコリアンを総称する。

表1 行事食とそれに関連する儀礼の調査項目³⁾

基本 属性	1. 年齢
	2. 性別
	3. 国籍
	4. 在日以降の世代
	5. 出身地
	6. 一世の来日年次
	7. 家族構成
	8. 居住地
民族 的 属 性	1. チェサの参加および継承意志
	2. チェサを何代まで祭るか
	3. 行事の過ごし方
	4. 家庭での正月料理
	5. 焼魚の種類
	6. 結婚式と結婚式の披露宴の主な料理
	7. 正月・結婚式以外の伝統行事
	8. 行事食の材料の購入場所
	9. 正月料理の盛り付け方法
	10. 箸の素材
	11. 箸の置き方
	12. 母国語力(会話)
	13. 家庭での民族教育
	14. 民族的な生活様式を大事にすること
	15. 韓鮮・朝鮮料理は心の故郷を感じさせる
	16. 国際化時代において韓国・朝鮮の 伝統文化は世界に広がると思う

表2 基本属性

項目	区分	大阪	川崎
		%	%
1. 年齢 N=705/122	10代	11.5	1.6
	20代	48	15.6
	30代	33.0	22.1
	40代	43.7	29.5
	50代	45	12.3
	60代以上	24	18.9
2. 性別 N=705/122	男性	23.3	34.4
	女性	76.7	65.6
3. 国籍 N=705/122	韓国籍	59.6	64.8
	朝鮮籍	37.7	32.8
	日本籍	2.7	2.5
4. 在日以降 の世代 N=684/122	一世	1.8	6.6
	二世	51.0	53.3
	三世	45.3	39.3
	四世	1.9	0.8
5. 出身地 N=666/119	慶尚道	28.8	67.2
	全羅道	6.6	8.4
	濟州島	61.9	15.1
	その他	2.7	9.2
6. 一世の 来日年次 N=298/68	第一期	1.0	2.9
	第二期	22.5	20.6
	第三期	43.3	52.9
	第四期	33.2	23.5
7. 家族構成 N=676/101	大家族	11.4	21.8
	核家族	87.6	77.2
	その他	1.0	1.0
8. 居住地 N=623/122	生野/川崎	76.1	70.5
	その他	23.9	29.5

調査期間は、大阪市では2000年11月から2001年4月まで、川崎市では2002年1月から2002年4月まで行った。アンケート調査は大阪市では特に生野区を中心として1000世帯、川崎市では特に川崎区を中心として400世帯を対象に行い、それぞれの有効回収率は70.5%、40.6%であった。さらに、両地域とも聞き取り調査で、1回目は上記の期間の正月に在日コリアンの家

3) 基本属性において、「6. 一世の在日年次」の渡航時期区分に第1期(1909年以前)、第2期(1910-1925年)、第3期(1926-1938年)、第4期(1939-1945年)にわけた。民族的属性において、「5. 焼魚の種類」と「10. 箸の素材」は普段、生活環境および便利性に変化しやすいと思われるが、チェサという儀礼の精神的側面も含んでいると考えて、変化しにくいのではないかと思い民族的属性として設定した。表1に関する詳しい説明は前稿(黄2002a、2003)参照

庭を訪問して、正月料理と正月の過ごし方などを調べ、2回目は2002年7月から9月の間に内容を補充するためもう一度行った。なお、アンケート調査の回答は、各世帯ごと1名によって記されている。

大阪市と川崎市における在日コリアンの形成過程については前稿(黄2001、2002a)で説明した。

(2) 調査項目

調査項目は、大きく基本属性と民族的属性に分けられる(表1参照)。

(3) アンケート調査の集計方法

集計方法は、回収されたデータの各項目ごとに無回答を除外した上で、大阪市のデータはカイ2乗検定、川崎市はデータが少ないため正確確率検定により有意性を確認するとともに、その結果を補充すべく聞き取り調査も実施した。

III アンケート調査結果

本稿は民族的アイデンティティと食文化との関係に重点を置いたので、基本属性と民族的属性に関するアンケートの結果については表2と表3に示すにとどめ、詳しい説明は別稿(黄2002a、2003)に譲りたい。さらに、与えられた枚数の制限を超えるので、最低限必要な表を除いて割愛した。

表3 民族的属性

		大阪	川崎			大阪	川崎
項目	区分	%	%	項目	区分	%	%
1. チェサの参加 N=666/114	いつもする	88.4	84.2	9. 正月・結婚式以外の 伝統行事 N=488/92	ベギルランチ	[31.6]	[53.8]
	時々する	6.8	8.8		トルランチ	[74.2]	[86.8]
	全くしない	4.8	7.0		民族風誕生日	[24.0]	[56.0]
2. チェサの継承意志 N=667/121	ぜひ継承	34.5	34.7	民族風還暦	[37.3]	[36.3]	
	できるだけ継承	44.7	47.9	民族風葬式	[36.3]	[30.8]	
	こだわらない	20.8	17.4	10. 行事食料理の 材料の購入場所 N=617/116	韓国・朝鮮専門店	[90.8]	[86.2]
3. チェサは何代 まで祭るか N=619/110	1代	19.2	26.4	近所のスーパー	[17.7]	[37.9]	
	2代	25.8	30.0	その他	[0.5]	[6.0]	
	3代	28.9	17.3	11. 正月料理の 盛り付け方法 N=705/116	重箱	[22.2]	[11.2]
	4代	2.1	0.9	大皿と一緒に	[23.1]	[24.1]	
	初代	2.1	6.4	各皿に品目別	[70.0]	[73.3]	
4. 行事の過ごし方 a. 正月 N=666/110	わからない	21.8	18.2	その他	[1.9]	[-]	
	新暦	84.2	74.5	12. 箸の素材 a. チェサのお膳に使う N=645/103	金属	[90.5]	[91.3]
	旧暦	11.1	12.7	プラスチック	[1.4]	[-]	
b. お盆 N=609/96	両方	4.7	12.7	木	[9.3]	[10.7]	
	新暦	41.4	32.3	1. b. 普段使う N=696/112	金属	[5.0]	[9.8]
	旧暦	55.7	59.4	プラスチック	[18.0]	[17.9]	
5. 家庭での正月料理 N=665/111	両方	3.0	8.3	木	[89.9]	[80.4]	
	図1参照			13. 箸の置き方 N=695/114	横	59.4	47.4
				縦	10.9	23.7	
6. 焼魚の種類 N=607/101	鯛	[55.5]	[77.2]	氣にしない	29.6	28.9	
	ぶり	[2.1]	[2.0]	14. 母国語力(会話) N=688/112	会話全部	0.9	1.8
	甘鯛	[69.0]	[11.9]	いくつかの単語	69.5	81.3	
	にしん	[18.1]	[51.5]	全く使わない	29.7	17.0	
	いしもち	[19.3]	[75.2]	15. 家庭での民族教育 N=688/112	たくさんある	37.5	34.8
7. 結婚式 N=667/112	さけ	[2.3]	[6.9]	すこしある	40.6	49.1	
	日本風	[4.5]	[3.6]	ほとんどない	10.6	12.5	
	韓国・朝鮮風	[40.9]	[38.4]	全く使わない	11.3	3.6	
	日本風+韓国・朝鮮風	[29.2]	[28.6]	16. 民族的な生活様式 を大事にすること N=697/115	そう思う	47.2	63.4
	西洋風	[3.4]	[3.6]	ややそう思う	32.9	26.1	
8. 結婚式の披露宴の 主な料理 N=672/114	韓国・朝鮮風+西洋風	[23.4]	[28.6]	そう思わない	19.9	10.5	
	和食	[3.0]	[5.5]	17. 韓国・朝鮮料理は 心の故郷を感じさせる N=699/115	そう思う	37.3	52.2
	韓国・朝鮮料理	[6.0]	[21.2]	ややそう思う	30.6	28.7	
	和食+韓国・朝鮮料理	[7.3]	[9.6]	そう思わない	32.1	19.1	
	中華料理	[79.9]	[48.6]	18. 国際化時代において 韓国・朝鮮の伝統文化は 世界に広がると思う N=696/114	そう思う	27.2	31.5
洋食	[5.4]	[5.5]	ややそう思う	38.7	36.0		
洋食+韓国・朝鮮料理	[1.9]	[9.6]	そう思わない	34.1	42.5		

*[]は複数回答を指す

IV 民族的身份と食文化との関係

本稿では、民族的身份を端的に示す指標として「民族的な生活様式を大事にすること4)」をとりあげ、この項目と食文化との関係を、行事食を中心に調べることにする。なお、以下「民族的な生活様式を大事すること」に対する回答のうち、「そう思う」を「民族性強」、「ややそう思う」を「民族性中」、「そう思わない」を「民族性弱」と略記することにする。そこで民族的身份の指標と行事食に関するすべての項目に対して、在日コリアンにおける民族的身份と食文化、特に行事食との関係を大阪市と川崎市を事例として考察した。大阪市のデータはカイ2乗検定、川崎市のデータは正確確率検定により有意性を確認した(黄2002a, 2002b参照)上でまとめたのが表4になる。

表4 民族的身份と食文化の関係

大阪市		川崎市	
関連がみられた項目	関連がみられなかった項目	関連がみられた項目	関連がみられなかった項目
a. チェサの継承意志 b. 家庭での正月料理 c. 結婚式 d. 正月・結婚式以外の伝統行事 e. 行事食の材料購入場所 f. 正月料理の盛り付け方法 g. 箸の素材(チェサのお膳に使う)	h. チェサの参加 i. 結婚式の披露宴の主な料理 j. 箸の置き方	なし	a. チェサの参加 b. チェサの継承意志 c. 家庭での正月料理 d. 結婚式 e. 結婚式の披露宴の主な料理 f. 正月・結婚式以外の伝統行事 g. 行事食の材料購入場所 h. 正月料理の盛り付け方法 i. 箸の素材(チェサのお膳に使う) j. 箸の置き方

4) この指標の設定に関しては前稿(黄2002a)を参照

表4からみると大阪市の場合、チェサの継承意志、家庭での正月料理、結婚式、正月・結婚式以外の伝統行事、行事食の材料購入場所、正月料理の盛り付け方法、箸の素材(チェサのお膳に使う)においては民族的アイデンティティとの関連がみられた。そして、民族的アイデンティティが強いほどチェサの継承の意志が強く、多品目の韓国・朝鮮の正月料理が作られ、結婚式は韓国・朝鮮風、伝統行事は民族風に行い、食材の購入場所は韓国・朝鮮専門店が利用され、正月料理の盛り付け方法と箸の素材は韓国・朝鮮式であった。

しかし、チェサへの参加、結婚式の披露宴の主な料理、箸の置き方については、民族的アイデンティティと関連がみられなかった。チェサへの参加は、子供の時から親につれて行かれたという慣習であり、自分の意志とは関係がないのである。そのため、チェサへの参加においては、民族的アイデンティティとの関連がみられなかったと考えられる。結婚式の披露宴の主な料理に関連がみられなかったのは、多くの人々が結婚式では中華料理店を利用しており、結婚式の披露宴の料理としては中華料理が多かったためだと考えられる。箸の置き方に関連がみられなかったのは、箸は食器の一部とも言える程食器と関連が深く、その食器自体が物質的な側面を持っていて、社会変化の影響を受けやすいと考えられるからである。

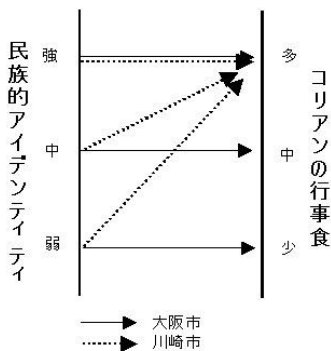


図2 民族的アイデンティティと行事食との関係

以上のような行事食に関する民族的アイデンティティとの関係を、大阪市の場合と川崎市の場合の差に注目して図式化すると図2のようになる。大阪市の場合、行事食においては、民族的アイデンティティが強いほどコリアンの行事食が多く攝取され、伝統的に行われていたが、民族的アイデンティティが弱いほど行事食が少なく攝取され、伝統的に行っていない。一方、川崎市の場合では、民族的アイデンティティと行事食の間には関連がみられず、民族的アイデンティティの強弱と関連なく、コリアンの行事食が多かった。

V 考察

以上のように、在日コリアンにおける民族的アイデンティティと食文化との関係を大阪市と川崎市を事例として比較考察した。その結果、大阪市の在日コリアンにおいては民族的アイデ

ンティティと行事食との間に関連がみられた。このような関連がみられた理由としては、民族的アイデンティティが食文化に影響を与えているためだと考えられる。一方、川崎市の場合では、民族的アイデンティティと行事食との間に関連がみられなかった。その理由として、星野命(1985)の説に注目したい。星野は民族的アイデンティティの任意性を主張して、民族集団への帰属意識は時代や状況とともに変化するもので、常に意識されるとは限らず、時と所に応じて意識の底から呼び起したり、また必要がなければ底にしまっておけるものである、と述べている。

このような星野説に基づきつつ、筆者は民族的アイデンティティが、自分自身の関わっている状況次第で強く現れたり、弱く現れたりする、と考えることにする。つまり、自分と違う他者と出会うことにより、自分が何者であろうかと考えることで、アイデンティティを自覚するようになって、アイデンティティが高まる。また、そのアイデンティティは時や所に応じて現れ方が違うと考えられる。

そして、民族的アイデンティティの現れ方について、筆者は下記の2つの場合を想定する。

第1は、周囲の環境が在日コリアンにとって「抑制的な環境」が相対的に弱い場合、民族的アイデンティティの強弱はそのままストレートに現れやすい。

第2は、周囲の環境が在日コリアンにとって「抑制的な環境」の程度が強い場合、民族的アイデンティティの強弱は屈折されて現れやすい。

ここで、「抑制的な環境」とは、個々人を取り巻く「社会的環境」により、自分自身が在日コリアンであることを日常的には表現しにくい環境のことである。

つまり川崎市の場合大阪市の場合に比べて、より「抑制的な環境」の下にあるため、民族的アイデンティティと行事食との間に関連がみられなかったと考えられる。

「抑制的な環境」の下では、民族的アイデンティティを強く感じさせる要因が作用すると、日常的には民族的アイデンティティが弱い人でも民族的アイデンティティが高揚する。行事食は儀礼(チェサと各種行事)意識が料理に含まれたものである。在日コリアンにとってチェサとは、自分の生きている據り所のようなものである。先祖から自分へのつながりを確かめ、親・兄弟・親戚が集まって自分の苦しみや哀しみなりを分ち合う場として、大変重要な役割を果たしている。すなわち、異文化の環境の中で移住者として生きるコリアンにとっては、何らかの形で自分を保ち、民族的アイデンティティを確認する機会である。その儀礼意識が作用して、民族的アイデンティティが高揚したと考えられる。

そこでこの推定の當否を探るべく、川崎市において在日コリアンの社会的環境の状況を、先行研究や聞き取り調査の結果からみとめることにする。さらに、その社会的環境により、実際に民族的アイデンティティがどのように現れてくるかについて、アンケート調査から検討する。

1) 先行研究および社会統計にみる社会的環境の比較

(1) 居住人口

まず、居住人口からみると、在日コリアンが全人口に占める比率は川崎市川崎区で2.0%、大阪市生野区で22.3%(2000年)と大きく違っている。つまり、大阪市の生野区は近所の人の中で4人の1人が在日コリアンであることになる。

谷富夫(1996)は、在日コリアンの社会が形成するためには、ある程度の人口学的前提があると述べている。生野区で在日コリアンの社会が形成可能なのは、全人口の4分の1以上が在日コリアンであるからであるとされる。C.S.フィッシャーによると、「民族的下位文化(ethnic subculture)」を構造化するためには、その制度を創出・維持できる人口の「臨界量(critical mass)」が確保されている必要があるとされる⁵⁾。そのため、生野区と比べて、川崎区は、付近に日本人が多くて、在日コリアンを中心とした社会を形成するのは難しいと思われる。

(2) 近所の付き合い

先行研究の調査データ⁶⁾からみると、近所の付き合いとして、川崎市では「日本人との付き合いがほとんど」が61.0%、「かなりよく日本人と」が26.0%、「ときどき日本人」が10.0%、「日本人以外の人々」が2.0%、「無回答」が2.0%であった。

それに対して、大阪市では、「日本人が多い」が7.7%、「半々である」が48.3%、「同胞が多い」が23.9%、その他が20.1%であった。

この調査から、川崎市の在日コリアンは、日常的に日本人との付き合いが多いのに対して、大阪市の在日コリアンでは、日本人より同胞同士での付き合いが多い。つまり、大阪市は川崎市と比べて日常的にも同胞と関係の深い生活をしているといえる。

(3) 職種

先行研究の調査データ⁷⁾からみると、現在在日コリアンの職種としては、川崎市では「自営業」が39.4%で、「被雇用」が60.6%である。しかし、大阪市では「自営業」が69.1%で、「被雇用」が30.9%である。この職種からみると、川崎市では自営業より被雇用が多くて、生計維持上もどうしても日本人とコンタクトを保持せざるを得ない面が強い。

5) 谷富夫(1996)「民族関係の社会学的研究のための覚書き—大阪市旧猪飼野・木野地域を事例として—」、駒井洋編『日本のエスニック社会』、明石書店pp.331-374による。

6) 大阪市の場合、①京都大学教育学部比較教育学研究室(1990)『在日韓国・朝鮮人の民族教育意識』、明石書店、p.15による。一方、川崎市の場合は、川崎市市民局国際室(1993)『川崎市外国籍市民意識実態調査』、川崎市、p.41による。

7) 大阪市の場合は前掲6)①のp.16、川崎市の場合は前掲6)②のp.51による。しかし、ここでの数値は、本稿と関わる自営業と被雇用だけに絞って、再計算した数値である。

(4) 市立小學校の在日コリアンの在籍率

大阪市生野区内には公立の小學校が19校ある。在日コリアンの全児童に對する比率は平均24.5%で、特に、在日コリアンが集住している5校の在日コリアン児童の比率は50%に近いかそれ以上である(2002年)。當然、教育とPTA活動の両面で問題が山積し、それに対處するための活動もいろいろ展開されている。

一方、川崎市川崎区内には小學校が21校ある。在日コリアン児童の比率は平均1.1%で、特に、在日コリアンの児童の比率が高い小學校でも14.2%にすぎず、次に高い小學校は3.0%さえもない(2002年)。

このように小學校の在籍率からみると、大阪市生野區は集住地區5小學校では1クラスの中で在日コリアンの児童が半分もいることになり、生野區全体を平均しても4人に1人が在日コリアンになる。一方、川崎市川崎區では、集住地區の一番多い小學校でも児童7人に1人が在日コリアンに過ぎず、平均すると100人に1人の割合になる。そのため、在日コリアン児童にとって、さらにはその保護者にとっても、川崎區は自分が在日コリアンであることを表現しにくい環境で、ほとんど日本人と生活を共にすることになる。

(5) 民族學級

1948年日本政府の民族學校閉鎖令に對して全國的反對闘争がおき、特に阪神教育闘争と深く関わって1950年に民族學級が開設された。現在、大阪市立小學校では7校で、そのうち、生野區だけで5校に民族學級が開設されている。聞き取り調査によると、民族學級が開設されている小學校で、民族學級に通っている在日コリアンの児童は、在籍率のおよそ90%(2002年)を越えるという状況である。

民族學級では正規授業が終わってから、放課後、在日コリアンの子供たちだけが集まって、自分の國の言葉・文化・歴史・音楽などを學ぶことにより、民族的自覺と誇りを身につけ、主体的に生きる力を養成する。

一方、川崎市では民族學級が開設されていない。聞き取り調査によると、民族學級ができてほしいと思う一方、民族學級が開設されると、むしろ、在日コリアンの自分の子供が差別される可能性があるということで、親から反對される状態である。さらに、民族學級を開設するためには、該當する児童數がある程度必要であるが、川崎市では児童數が多くないため、運営できないという面もある。

以上の先行研究や社會統計にみる社會的環境から、大阪市の在日コリアンと比べて、川崎市の在日コリアンは付近に日本人が壓倒的に多くて、日常的に生活するのに、在日コリアンの生活をありのままみせるのに制約がある。つまり、より「抑制的な環境」におかれているといえる。

2) 聞き取り調査による在日コリアンの心情と行動

川崎市の在日コリアンの日常生活について、2002年7月22日～28日の間に行った聞き取り調査(複数の在日コリアンを調査)によると、付近に日本人が多いことと、在日コリアンの職種としてサラリーマンが多いことから、日本人との付き合いが主であることがわかった。彼らの家に何か起こった時、一番早く助けを求めるところは隣の家、つまり日本人の家で、日常的には仲良く生活している。しかし、それにしても、日本人からの差別がないことはない。「川崎市は関東地方の日本人の気質をよく表わしていて、本音と建前を使い分けて行動していることが多い」と在日コリアンの人々は言う。そのため、川崎市に住んでいる在日コリアンは、それに対応しつつ生活している。たとえば、関東は差別が直接的ではなく遠回しでくるから、表面的にみると差別がなさそうに見えるかもしれない。しかし、裏に差別が強く残っていると感じている。

以下では、日常生活で、差別されるかもしれないという気持ちが強く、日本人の目を気にしている事例を具体的に挙げることにする。

[事例]

63歳と70歳の女性は、いつも在日コリアンの親睦會に参加している。しかし、「まつりで韓国伝統衣装(チマ・チョゴリ)を着て、みんなで回ってみませんか」と私が声をかけると、「その服を着てみんなの前に立つのが怖いからいやだ」とか、「わざと、朝鮮人ということみせて良いことない」と言って2人は断った。

[事例]

54歳の女性は、この前スポーツクラブに通うことになって、何人か友達ができ、仲良くなった。しかし、何日間か経って自分が在日韓国人ということ打ち明けた方がいいかなとすごく悩んで、結局、その人に在日コリアンということは打ち明け、それでも友達にしてくれるかと聞いてみた。しかし、その友人達は在日韓国人のことを理解してくれる人で、それは気にしないと伝えてくれてほっとした。

[事例]

33歳の女性の話によると、自分が朝鮮人であることを知っている日本人が、朝鮮人であることを触れないで付き合いおうとしている。そのため、仕方なく合わせて、そのまま付き合い合っているとっている。

[事例]

41歳の男性は、川崎区でも自分の子供のため民族學級を開いてほしいと思う。しかし、現実的に民族學級ができむしろ我が子が差別をうけることになるのではないかと、今は反

對している。わざと目立つ必要はないと思うからだ。

[事例5]

35歳の女性は、自分の子供が小學校に入る直前に、市から本名で學校に通わせるように薦める手紙をもらった。それで、かなり悩んだ結果、この子は自分がいなくなっても、日本で長く住むし、學校で一人目立って差別されたくないから、仕方なく通名にすることにした。

次の3つの事例は川崎市の學校で、「人權授業」を受けた後に書かれた生徒の感想文によるものである⁸⁾。日本人の目を気にしていることや、見えない所で差別の存在することが書かれている。

[事例6]

「自分は韓國人ですが、ずっと日本名で生きてきた。私が韓國人であることはみんな知っているから、別に本名を隠す気持はない。でも、いざ本名宣言をしたら、やっぱり怖いというか、不安になると思う。」

[事例7]

「ビデオの中で〇〇君が「本名を名のるのが怖い」と言っていたのが頭から離れない。櫻本中でも日本名を名のっている韓國人がたくさんいますが、彼らも同じように思っているのだろうか。そう考えると、この地域や學校でさえも、自分たちが気づかないところで差別が存在しているように感じる、小學校から人權について學んできたつもりだったが、結局は頭だけで理解してきたのかもしれない。」

[事例8]

「この川崎にも實際このような差別があることに驚き、ショックを受けた。自分の身の回りには韓國人の友達が、今も、そしてこの先も、このような現實の中で生きていくことを改めて思い知らされた。大人の方が私達より、在日韓國・朝鮮人のことを知らなすぎると思う。」

以上の事例の外にもいろいろ話があって、日常的に目に見えない差別の壓力を感じるとか、いつも心の中でひきめを感じて、自分から積極的にコリアンだと胸を張っていうことはできない、などの話を聞かせてくれた。上述の具体的な事例によると、在日コリアンだからいつ差別されるのかわからないし、遠回しにされる場合もあるから、直接差別を受けなくても差別されたくない氣持が強くて、日常的に気にしているといえる。

8) 川崎市外國人教育検討委員會(2002)『ともに生きる－多文化共生の社會をめざして－』、川崎市教育委員會、p42による。

一方では、抑制的な心情を持ちながら、日本人のように行動するのが有利な時は、そうする場合もある。

そのため、川崎市の在日コリアンは目立つよりも横並び意識が強く、近所の環境に合わせる性格を持っている。例えば、隣の人があるデパートで高価なお節料理を買ったと聞いたら、人の目を意識して自分も買わなくちゃいけないと思う。

このように川崎市に暮らす在日コリアンは、自分が在日コリアンということも忘れずに、コリアンの文化も守りながら、ホスト社会で目立たずに暮らすという2重生活をしているのである。

このような聞き取り調査から、ホスト地域社会の影響が川崎市の在日コリアンの行動を規制しており、それに対応して生活しているのが推測できる。つまり、川崎市では自分が在日コリアンということを表わしにくい、より「抑制的な環境」であるため、在日コリアンは裏では自分の母国の文化を守りながら、表では日本文化も受け入れ、日本人との表面的な「共生社会」一不利益を減らすため仕方なく共に生活する一の下で暮しているといえる。

以上の先行研究および社会統計にみる社会的環境の状況と聞き取り調査からわかるように、大阪市生野区の場合、日々の生活においては、在日コリアンとの付き合いが多くて、アイデンティティがいくぶん希薄化し自覚されずに生活を送っていると考えられる。そのため、自分の在日コリアンの生活を気にせずに、ありのままをみせて、相対的に開放化された生活をしている。そのため、民族的アイデンティティがストレートに表出できると思われる。

一方、川崎市川崎区の場合、日々の生活で在日コリアンより日本人との付き合いが多いことから、自分は何者かというアイデンティティを自覚させられ、アイデンティティが大阪市生野区と比べて強いと考えられる。また、ホスト社会のマイノリティとしての自分の立場を意識して、自分の在日コリアンの気持を抑えながら、日本人に合わせて生活しようとしている。しかし、自分と違うホスト社会(強い立場)の人と生活することを気に掛けなければならず、自分の気持を抑えて、より「抑制的な環境」を感じる事となる。それにより自分が心の中にもっているアイデンティティは外面に表出するのが難しくなる。つまりアイデンティティが屈折されて現れると考えられる。

次に、実際のアンケート調査により、その民族的アイデンティティの現れ方をみることにする。

3) アンケート調査によるアイデンティティの現れ方

大阪市生野区の相対的に開放化された生活の中での民族的アイデンティティの現れ方と、川崎市川崎区の在日コリアンにおかれた、より「抑制的な環境」が実際に民族的アイデンティティにどのように現れるかについて検討する。

すでに述べたように「抑制的な環境」におかれると、民族的アイデンティティとして、自分の

心にもっていることが、ストレートに外に表出できない場合が多いと考える。そのため、「内面的に持っているアイデンティティ」と「外面的に表出するアイデンティティ」の2つの視点を設定する。

「内面的に持っているアイデンティティ」の指標として、筆者の実施したアンケート調査における「韓国・朝鮮料理は心の故郷を感じさせる」とりあげた。この項目は自分のルーツがコリアンだということを外部の圧力にかかわらず自分の心の内に持っていることを表わしていると筆者はとらえたい。

一方、「外面的に表出するアイデンティティ」の指標として同じアンケート調査の中の「国際化時代において韓国・朝鮮の伝統文化は世界的に広がると思う」とりあげた。この項目は、自分を取り巻くホスト社会の中で日常的にコリアンとして生活するのにプラスイメージ(誇り)を持っているのかどうか、持っている場合には、韓国・朝鮮の伝統文化が世界的に広がると肯定的な考えをもつと推定して設定した。つまり、日常的に在日コリアンということが外部に表出できるかどうかを判断するのに適当な項目と考えられる⁹⁾。

以上のような想定のもとに、上記の2項目に対する回答を分類・整理すると図3のようになる。大阪市の場合、「内面的に持っているアイデンティティ」の「強」が37.3%で、「外面的に表出するアイデンティティ」の「強」が27.2%で、後者が10.1%少ない。それに対して川崎市の場合には、前者の「強」が52.2%なのに対して、後者の「強」が31.5%で、その差がおおよそ2倍になる。また、大阪市は前者の「弱」が32.1%、後者の「弱」が34.1%で、僅かに後者が多い。それに対して、川崎市は前者の「弱」が19.1%、後者の「弱」が32.5%であり、後者が13.4%も多いのである。つまり、自分がコリアンであるという自覚を内面的に持っていることと、外面的に表出することの差が、大阪市と比べて川崎市の方でかなり高くみられることになる。これは、川崎市の在日コリアンが日本人との日常的な付き合いの中で、コリアンであることに關してより「抑制的な

環境」の下にあるため、民族的アイデンティティをもっていても日常の場で表出できない状況であると解釋できるであろう。

以上から、大阪市と川崎市の在日コリアンにおいて、民族的アイデンティティがどのような形で現れるかについて、食文化を通して検討してみた。その結果、大阪市においては、民族的アイデンティティがそのまま食文化に影

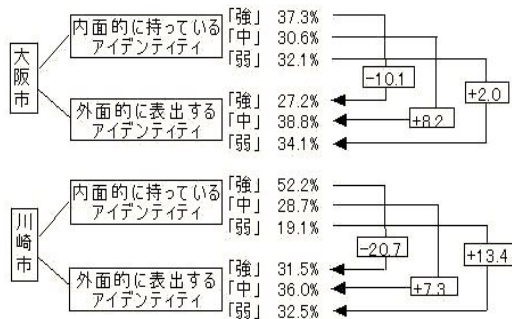


図3 大阪市と川崎市におけるアイデンティティの現れ方

9) 筆者はそのような意図のもとに、この項目を設定したが、回答者の中に目下の自己の立場を考慮せず、本國の伝統文化が世界的に広がると解釋した人もいるかもしれない。

響を与えていたが、一方、川崎市では、大阪市と比べて民族的アイデンティティが屈折した形で現れ、直接食文化に反映されることは少なかった。これまでの分析・考察から民族的アイデンティティの強弱が在日コリアンの食文化の相違に影響を与えることがわかった。さらに、ホスト地域社会の環境により民族的アイデンティティの現れ方が、ストレートに食文化に影響を与える場合と、屈折されて食文化に影響を与える場合のあることが明らかとなった。

最近、日本社会で韓流烈風に韓国文化が浸透しており、韓国と韓国人に対する日本人の考え方がだんだん変わってきている。それにより、日本で居住している在日コリアンに対する意識も変わってくると思われる。そのため、在日コリアンの民族的アイデンティティもその社会的環境により変わってくると予測される。今後の課題としてその視点に重点をおき、かれらの民族的アイデンティティが韓流烈風以前と以降にどのように変わってきたか検討してみたい。そのためにも、本稿は重要な資料になると思う。

【参考文献】

- ・ 谷富夫(1996) 「民族関係の社会学的研究のための覚書き—大阪市旧猪飼野・木野地域を事例として—」 駒井洋編『日本のエスニック社会』、明石書店、331-374頁
- ・ 星野命(1985) 「民族的帰属意識」『文化人類学Ⅱ』 アカデミア出版会 34-45 頁
- ・ 黄慧瓊(2001) 「川崎市の在日コリアンにおける食文化の民族的アイデンティティ—正月料理を主たる対象として—」 日本文化学報10、341-359頁
- ・ 黄慧瓊(2002a) 「大阪市の在日コリアンにおける食文化の民族的アイデンティティ(第一報) 行事食を主たる対象として」 日本家政学会誌 53-7、671-680頁
- ・ 黄慧瓊(2002b) 「大阪市の在日コリアンにおける食文化の民族的アイデンティティ(第二報) 日常食を主たる対象として」 日本家政学会誌 53-11、1097-1104 頁
- ・ 黄慧瓊(2003) 「在日コリアンにおける食文化にみる民族的アイデンティティ—大阪市と川崎市を比較して—」 奈良女子大学大学院人間文化研究年報18、265-278頁

要 旨

本研究は、在日コリアンにおける民族的アイデンティティと食文化との関係を、特に行事食を中心に、大阪市と川崎市を事例に考察したものである。

調査対象としたのは、大阪市と川崎市における在日コリアンの集住地区で、その地区における世帯ごとに行事食について、その内容を調べた。調査方法はアンケート調査を中心に、聞き取り調査も行った。

その結果、大阪市の在日コリアンにおいては民族的アイデンティティと行事食との間に関連がみられた。このような関連がみられた理由としては、民族的アイデンティティが食文化に影響を与えているためだと考えられる。

一方、川崎市の場合では、民族的アイデンティティと行事食の間には関連がみられなかった。その理由として「抑制的な環境」が作用したためだと考えられる。「抑制的な環境」では民族的アイデンティティを強く感じさせる要因が作用すると、普段民族的アイデンティティが弱い人でも民族的アイデンティティが高揚する。行事食は儀礼(チェサと各種行事)意識が料理に含まれたもので、その儀礼意識が作用して民族的アイデンティティが高揚したと考えられる。

このような分析と考察から、民族的アイデンティティの強弱が在日コリアンの食文化の相違に反映され、さらに、ホスト地域社会の環境の違いによって、民族的アイデンティティがストレートに表現される場合と屈折されて表現される場合のあることが明らかとなった。

キーワード：在日コリアン、食文化、行事食、民族的アイデンティティ、大阪市、川崎市

투 고 : 2006. 2. 28

1차 심사 : 2006. 3. 11

2차 심사 : 2006. 4. 1

住 所 : 경기도 성남시 분당구 정자동 13-1 동양파라곤 105동 1603호

電 話 : 031-726-3947/010-9476-3947

e-mail : hhk5500@daum.net